



### 主な災害

#### 〈火山〉

伊豆大島には**三原山**があり、火山活動が続いている。玄武岩質のマグマで粘性が低いため、噴火は穏やか。

伊豆大島は海溝と平行にのびる火山前線上に位置しており、この線より東側には火山が存在しない。



#### 〈大雨〉

伊豆諸島には毎年平均**5.4**個の台風が接近する。

○2013年の土砂災害（台風26号）  
24時間に824mmの大雨が降り、元町地区では大規模な**表層崩壊**が発生。集中豪雨であったため排水が追い付かず、大きな被害をもたらした。



↑表層崩壊の様子

### 自然との共生

#### 〈農業〉

○明日葉  
火山灰に覆われた水はけのよい土壌での栽培に適しており、畑の休閑中に栽培。  
○ヤブツバキ  
温暖多雨の気候と水はけのよい土壌が生育に適し、火山ガスにも強い。椿油や炭に利用。  
○オオシマザクラ  
塩害・潮風に強く海岸近くで生育し、加工品に利用。



#### 〈波浮港〉

もとはマグマ水蒸気噴火でできた火口湖だったが、津波で海とつながった。その後掘削工事を行って波浮港として開港。



⇒災害で発生したものを**活用する**発想

#### 実際に見たもの



黒色スコリア 赤色スコリア 避難シェルター 縄状溶岩 第二次噴火口

#### ○最近の噴火

- ・ 大規模噴火…1777年 三原山が現在の姿に
- ・ 中規模噴火…1986年
- 山の頂上の噴火口からだけでなく、山の中腹からも割れ目噴火が発生。
- 集落の数百メートル手前まで溶岩流が到達し、**全島避難**に。



↑1986年11月19日夜の噴火

噴火時の避難がスムーズにいくような対策を設定。



↑伊豆大島火山防災マップ

細かな避難ルートや避難場所の設定  
→案内の表示、避難方法の明確化

定期的な避難訓練の実施  
→島内では多くの人が参加

### なぜ人々は伊豆大島に住み続けるのか？

- ・ 身近なコミュニティの**安心感**…関わりが濃く、困ったときに助け合える
- ・ 高い**防災意識**…町単位での訓練への高い参加率から、災害時の被害が大きくなりにくい
- ・ 大島が**特別危険なわけではない**…どのような場所でも、住み続けるリスクはある

### 提言 ～火山と共生する社会の在り方～

#### 災害への向き合い方

1. 災害にはリスクだけではなく、**工夫して利用できるものがある**と捉える。
2. 災害の恩恵を利用するために、**自然主体の災害を受け流すような対策**をする。
3. 特別噴火を意識してはいないが、**普段から訓練を行い**、火山についての**広報**も行う。  
→「**自然とともに暮らす**」意識が根付いている。



#### 具体的な取り組み

1. 上記のほかに、アシタバの飼料への利用、ヤブツバキの葉・実を活用する取組を行う。  
→**島の産業と火山の恵みを掛け合わせる**。
2. 大宮沢溶岩導流堤を作り、**土砂や溶岩流が民家を逸れて**海に流れるように誘導する。
3. 「広報おおしま」による火山情報の連絡を毎月行う。

日本に住む以上、私たちが**災害のリスクを常にもっている**